

1880年代ロシア海軍水路測量家たちによる日本沿岸海図の出版(ロシア国立海軍文書館史料より)ⁱ

ワレンチン・スミルノフ

19世紀末におけるロシアの海図—その作製と印刷

1880年代、ロシア海軍省内で、航海の安全の諸問題を主導したのは、水路局【Гидрографический департамент】である。同局は1885年統合水路本部【Главное гидрографическое управление】に改編された。

水路局も統合水路本部も海図作製部門があり、その中に製図部があった。製図部では何人もの海軍士官と製図士および製図生たちが働いていた。彼ら全員、経緯度網の算出【вычислением сеток】とそれに則った海図作製に携わっていた。

ロシアの海図はメルカトル式投影図法で作製されていた。その際、地球は、 $a=20,926,202$ フィート、 $b=20,854,895$ フィート、 $c=1:293,465$ (A.R. クラーク【Alexander Ross Clarke(1828-1914)】のサイズ)の回転楕円体【эллипсоид вращения】とみなされた。海図の最も主要な要素は、沿岸線と海底の起伏であった。30フィート以下の深さは海図ではフィートで、30フィート以上についてはサージェンで示された。この場合の海上サージェンは6フィートに等しかった。

満潮と干潮の差が大きい海域では、水深はその中間水位【среднему уровню中間レベル。日本の海事用語では「平均水面】で、他の場所では「最も低いレベル】【同様に、「最低潮面」、「最低水面】で記された。これらの情報は海図の表題の中で示された。浅い場所では、海底の等高線は(水深30フィート、24フィート、12フィート、6フィートで)それぞれ特別な点線で描かれた。海図では水深と同時に海底の土質が併記された。

その他に海図では以下のように情報が示されていた。すなわち、灯台の灯の性質、すなわち灯質、およびそれら灯の要素【элементы、光力、光達距離、灯色、周期等か】、警告標識、岸の構造、目印となる岬と丘陵、海流の方向と速度、地磁気の偏角、その他に、N. ズィビンの『航海術指針、第二部】【Н. Зыбин«Руководство к кораблевождению. Часть II»】の中で詳細に述べられている情報である。

海岸の測量と測定【Опись морских берегов и промер】は天文観測点と三角点に基づいていた。それらの結果は測量図に記入され、その測量図が様々な縮尺(例えば、1インチが300サージェン)の海図および図作製の資料となった。【以下картаは「海図」、план(=plan)は「図」と訳した】。

海図および図の原図が仕上がった後は、それを銅板に刻み込む作業が行われた。その作業には1年近くを要し、費用もきわめて高いものであった(1枚の海図につき1,000ルーブル近く)。

型押し印刷【печатание оттисков】は手動の作業台で行われ、1日10時間の作業で50枚から80枚の海図が作製された。その際、銅板は炭の焔炉の上で予め熱せられ、それに地形図を手で刷り込むのであった。銅板の型からの海図作製は、非常に手間がかかること以外に更に3つの重大な欠点があった。すなわち、型押しされて刷り上がったものは、著しくかつ不均等に變形すること、銅板の型が使用可能なのは刷り上がり1,500枚から2,000枚までで、耐久性において不十分なものであった。

海図が急を要する場合は、リトグラフ印刷(ドイツのバイエルンの採石場から調達された石版
(60) 1880年代ロシア海軍水路測量家たちによる日本沿岸海図の出版(スミルノフ)

によるもの)の方法がとられた。しかしながら、刷り上がりの質においてリトグラフ印刷のものは銅板型よりは著しく質が劣っていた。それ以外にリトグラフ印刷の大きな欠点として、リトグラフそのものが150kg近くの重量があるために扱いが不便であった。

19世紀の後半には、リトグラフ印刷に代わって複写法【копирование】(直接複写方式【автографический способ】)が用いられるようになった。そのために(海図・図の)測量図は、化学墨を用いて【химической тушью】蠟引きした透明なキャラコあるいは特別な処理を施した紙に描かれ、次にその線画がリトグラフ上に転写され【переводился】、リトグラフから平版印刷方式で複製された。

銅板からの海図印刷にはアレクサンドリア紙が、リトグラフ印刷にはアレクサンドリア紙あるいは子牛皮紙、上光沢紙が用いられた⁽¹⁾。

水路局で刊行されたロシア製海図の質が高かったことは、1875年のブリュッセルとパリ、1876年のフィラデルフィア、1881年のヴェネチアの万国博覧会で、海図作製の仕事に対して与えられたメダルおよび賞状が如実に物語っている⁽²⁾。

水路局は、同局で作製した海図と書籍、および外国で作られたものを海軍艦船、(港湾)機材部【инструментальные камеры】、海軍関係のその他の施設に給与した(下記表参照)。

海軍艦船、港湾機材部、海軍関係その他の施設への海図および航海指針の備え付けに関する情報⁽³⁾

年	ロシア製海図	ロシア書	外国製海図	外国書
1886	9,856	390	18,000	390
1887	2,624	351	9,300	255
1888	3,582	366	10,977	290

ロシア語による日本沿岸の海図発行

1882年秋、ロシア海軍省水路局において複写する方向で、日本の海図と図を発行するという考えが公にされた。10月27日に、製図部部長補で海軍航海士隊大尉【капитан Корпуса флотских штурманов】М.А. ポポフが、ロシア語で刊行対象とするべき日本の海図と図として、次のようなリストを準備した。

- 1) № 118. 1枚に2つの図。佐渡島小木湾(縮尺1/9,347=1インチが111サージェン)と富山湾の伏木錨地(縮尺1/11,985=1インチが142サージェン)。
- 2) № 121. 能登半島東岸七尾北湾図(縮尺1/49,560=1インチが590サージェン)、附壽都岬小図(縮尺1/15,200=1インチが300サージェン)
以上の3つの図は1枚の紙に配置すること(第一葉【Лист 1】)
- 3) № 114. 若狭湾小浜港【План гавани Огами】の図(縮尺1/23,473=1インチが280サージェン)(第二葉【Лист 2】)
- 4) № 117. 若狭湾宮津港【гавани Миадси (Miadisy harbour)】の図、附：湾近くにある伊根港図(いずれも縮尺1/18,270=1インチが217.5サージェン)(第三葉【Лист 3】)
- 5) 油谷湾図(縮尺1/27,062=1インチが322サージェン)(第四葉【Лист 4】)⁽⁴⁾
- 6) № 134. 隠岐島海図(縮尺1/115,080=1インチが1,370サージェン)、附：西郷港図(第六葉【Лист 6】、位置【позиции】7と8)

7) №107. 西郷港【Saigo-harbour】図（縮尺1/13,256=1インチが158サージェン）、隠岐島海図に添えられ、2分の1に小さくしたものの⁽⁵⁾。

すでに10月28日に、製図部長補で海軍航海士隊大佐【полковник Корпуса флотских штурманов】S.P. サモフヴァロフは、水路局長で海軍航海士隊中將【генерал-лейтенант Корпуса флотских штурманов】F.F. ヴェセラゴに、「我々が保有する日本沿岸海図を充実させるために」上記の日本の海図および図を「複写方式により刊行すること」の許可を願い出て、了承を得ていた⁽⁶⁾。

1882年の11月から12月にかけて、「(日本本州北西沿岸の)若狭湾宮津港」の最初のメルカトル式投影図法による海図が、その北岸と南岸に置かれた二つの天文観測点に従って作成された。その際の作業方法は次のようなものであった。

日本の海図№117にあるすべての記載事項は、有償でこの仕事に加わらないかと勧誘されその気になった、日本公使館一員の安藤謙介によりロシア語に翻訳された⁽⁷⁾。それに際し、1882-1883年、安藤は日本の海図16枚をロシア語に翻訳し、それに対して133ルーブルが支払われたことを指摘しておかなければならない（海図1枚につき平均7.5-10ルーブルということになる⁽⁷⁾）。具体的には、例えば1883年1月7日、海軍航海士隊大佐【полковник Корпуса флотских штурманов】S.P. サモフヴァロフは水路局長に、8枚の日本海図のロシア語への翻訳作業に対し、安藤謙介氏に58ルーブル65コペイカを支払う許可を求めた。1月10日、F.F. ヴェセラゴは当該額の支出要請書類に了承の署名をした⁽⁸⁾（資料1）。

製図部の士官と部員たちは与えられた作業を「勤務外の時間に」すなわち午後15時以降に行った（勤務時間は9時から15時であった）。例えば、海軍航海士隊大尉【капитан Корпуса флотских штурманов】M.A. ポポフは、宮津港海図および2枚の日本図のための経緯度網の算出と分割【вычисление и рабивка сетей】を仕上げ、それらをもとに宮津港海図が作製された。成された仕事を、12月17日、ポポフの同僚である海軍航海士隊少尉【подпоручик Корпуса флотских штурманов】V. ブリャンツェフは30ルーブルと評価した。水路局の製図士P. アニシモフは「勤務外の時間に」宮津港海図を作製した。彼の労働は47ルーブル73コペイカと評価された。

このように、宮津港海図のための経緯度網の算出と分割と作製の基本的作業は1882年12月に完了した。

興味深いことに、S.P. サモフヴァロフがF.F. ヴェセラゴのところで最初の「日本を対象とした海図」に関するいくつかの書類に署名したのは、1882年12月2日になってのことであった。書類の内容は、日本製の図を元にメルカトル式投影図法による宮津港海図を作製することへの許可、それらの作業に対する海軍航海士隊大尉【капитан Корпуса флотских штурманов】M.A. ポポフおよび製図士P. アニシモフへの報酬支払要請書である⁽⁹⁾。

それから3ヶ月半後の1883年4月7日、M.A. ポポフは、日本の資料をもとに、メルカトル式投影図法による宮津港海図作製作業の方法を述べた解説書を準備した。その中で彼は次のことを特に記している。すなわち、この海図を作成する際の資料となったのは、「錨地伊根港図を付した宮津港図（№117）」（いずれも縮尺：1インチ=217サージェン）と、錨地伊根港の図を付した宮津港図（1インチ=870サージェン=1マイル）が記載されている「若狭湾海図（№139）」（縮尺：1インチ=3.3海里）であった。宮津港の奥まった所（ハシマン川【現在は大手川】の河口）と錨地伊根港への入口（青島の南端）の2ヶ所に天文観測点があり、その緯度と経度はそれら図に記されている（資料2）。

○図

タミオカ湾【富岡湾か】とクツイーノツ湾【口之津か】【「富岡湾及口之津港」海図は確かに存在する】（縮尺：1インチ=109サーゼン）

油谷湾（縮尺：1インチ=326サーゼン）；七尾湾北部分（縮尺：1インチ=285サーゼン）

オガマ港【小浜港か】（縮尺：1インチ=290サーゼン）

○海図

若狭湾海図（縮尺：1インチ=3.3マイル）、附境港（縮尺：1インチ=554サーゼン）と敦賀港（縮尺：1インチ=770サーゼン）、および七尾湾図（縮尺：1インチ=580サーゼン）⁽¹¹⁾。

1883年6月17日、1867年の日本による測量をもとにした東京湾、相模湾、駿河湾各湾のメルカトル式投影図法の世界図作製に対するF.F.ヴェセラゴの許可が得られた⁽¹²⁾。同作業は1884年末から1886年始めにかけて行われた。なかでも、1884年2月にM.A.ポポフは、駿河湾と（日本本州南東部にある）相模湾のメルカトル式投影図法の世界図のための経緯度網の算出をした⁽¹³⁾。それから彼は、東京湾海図のための「メルカトル式投影図用の経緯度網」を計算した（資料3）。1884年末にかけて、1880年の日本による測量をもとに、経緯度網が縮尺1インチ=1,000サーゼンで2枚の紙に製図された。同時期、駿河湾海図と若狭湾海図（いずれも縮尺：1インチ=2,000サーゼン）が製版とリトグラフ印刷に向けて準備された⁽¹⁴⁾。

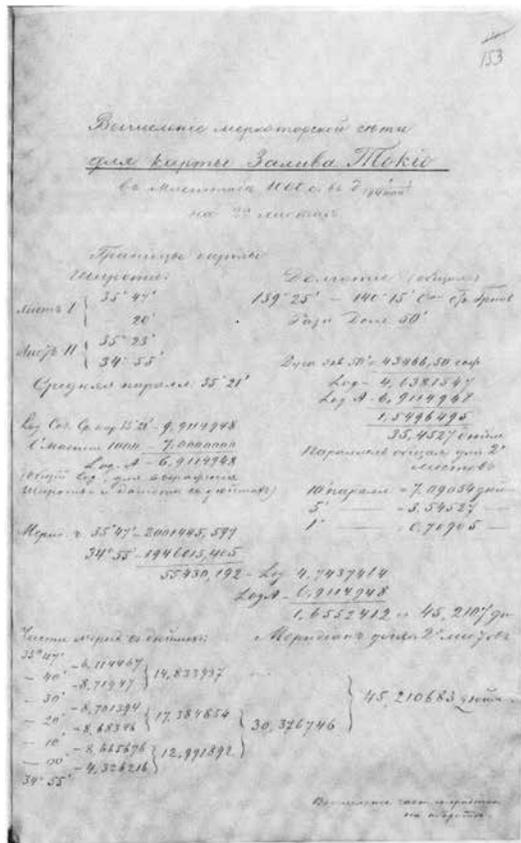
1885年2月18日、海軍水路局局長N.L. プシシイン⁽¹⁵⁾、海軍航海士隊大佐【полковник Корпуса флотских штурманов】S.P. サモフヴァロフは、東京湾の手書き原図およびその説明書を文書部の保存目録に記載することを指示した⁽¹⁶⁾。

1886年3月海軍航海士隊中尉【поручик Корпуса флотских штурманов】V. プリヤンツェフは、化学墨を用いて複写された東京湾海図（一枚もの）の査定をし、その結果、50ルーブル49コペイカの労働と評価された。1886年3月21日プシシイン海軍大佐とサモフヴァロフ陸軍大佐は、「1885年に着手され化学墨を用いた東京湾一枚もの海図の複写に対し」製図士K.N. プレントシプレヘルに50ルーブル50コペイカを支払うための国庫金総出納局宛の支払要請書に署名をした⁽¹⁷⁾。

これらと同時に、日本沿岸の他の海図の作製作業は続けられた。同作業はすでに1883年10月25日に発議され、その際サモフヴァロフ大佐は中将【генерал (-лейтенант) 既出】F.F. ヴェセラゴに、90.5から916サーゼン=1インチの様々な縮尺の海図と図26枚を「日本の原図のリトグラフ印刷法により」複製する許可を求めた。それらのうち最初に作成された7枚は朝鮮半島沿岸部に関係するものなので、ここでは考察しないことにする。それ以外の16地点の対象となっているのは、主として、湾と港（例えば対馬島の）、海峡（例えば早崎）、港（四国の島々にある例えばミツクイエ【三机嚮か。「伊予国三机嚮、JAPAN NORTH COST OF SIKOKU MITSUKUYE(赤門地図8-112)」）、停泊地と投錨地であった。海図は3枚のみで、そのうちの2枚が日本西海岸のもの、それらの内訳は、若狭湾、佐渡島を含めて新潟港への航路、さらに、八代湾を含めて早崎海峡である。計画対象のこれら海図と図は、最新のロシアおよびイギリスの世界図に則り、1875年にロシア海軍省水路局によって刊行された「日本海とペチリ湾【北直隸湾、現・渤海湾】を含めた黄海海図」の中に含まれた⁽¹⁸⁾。

F.F. ヴェセラゴの許可が得られ、日本沿岸を対象としたロシアの世界図の作製と刊行は続けられた。

1884年春、日本製世界図の翻訳作業には、サンクト・ペテルブルグ大学の学生ボルネマンが入る



資料3 メルカトル図法東京湾海図のための測量計算資料(断片) 作製者 海軍航海士隊大尉 M.A. ポポフ (РГАВМФ. Ф. 402. Оп. 2. Д. 3694. Л. 153.)

ことになった。1884年3月彼は、福島湾 (No.69)、岩島湾【富山湾入口】(No.42)、戸田湾 (No.83) の海図を含め、十枚の海図を翻訳した。この作業に対して彼に70ルーブルが支払われた (1枚当たり7ルーブル)⁽¹⁹⁾。

1884年3月20日M.A. ポポフは上官に説明書を提出し、中でも若狭湾海図の作製過程に付き詳細に記した。その中で彼は次のことを指摘した。

「若狭湾の海図(縮尺: 1インチ=3.3マイル)は、1867年、1873年、1879年の日本による測量に則って作製された日本の原図 (No.139) を変更なしにリトグラフ印刷で複製したもので、同湾の海図以外に4つの港の個別図をも含めたものである。これら4つの港図のうち今回作成された海図に複写が載せられたのは、坂井湾(縮尺: 1インチ=554サーゼン)と敦賀湾(縮尺: 1インチ=770サーゼン)の二つのみである。というのは、残りの二つの図は、同じく日本の資料をもとに、以前に刊行されているからである。ただし大縮尺にしてある。図の縮尺度は、図に付された線形尺度に合わせており、原図とは異なっている」⁽²⁰⁾。

1884年5月16日、F.F. ヴェセラゴとS.P. サモフヴァロフは水路局文書部主任【заведующему Архивом департамента】に、「新たに刊行された暫定的な若狭湾海図(縮尺: 1インチ=2,560サーゼン)、および日本の海図から1枚の紙に写された若狭湾図(縮尺: 1インチ=544サーゼン)

と敦賀湾図（縮尺：1インチ=770サーゼン）の署名入りの初刷を文書部の目録に登録する」ことを指示した⁽²¹⁾。

同じ時期に、能登半島七尾湾の北部分のロシア語による図の事前準備もなされ、それに関する説明書はM.A. ポポフが1884年3月1日に提出した⁽²²⁾。

翌年の1885年には、東京湾の海図2枚（縮尺：1インチ=1,000サーゼン）と以下の3枚が化学墨を用いてリトグラフにされた。

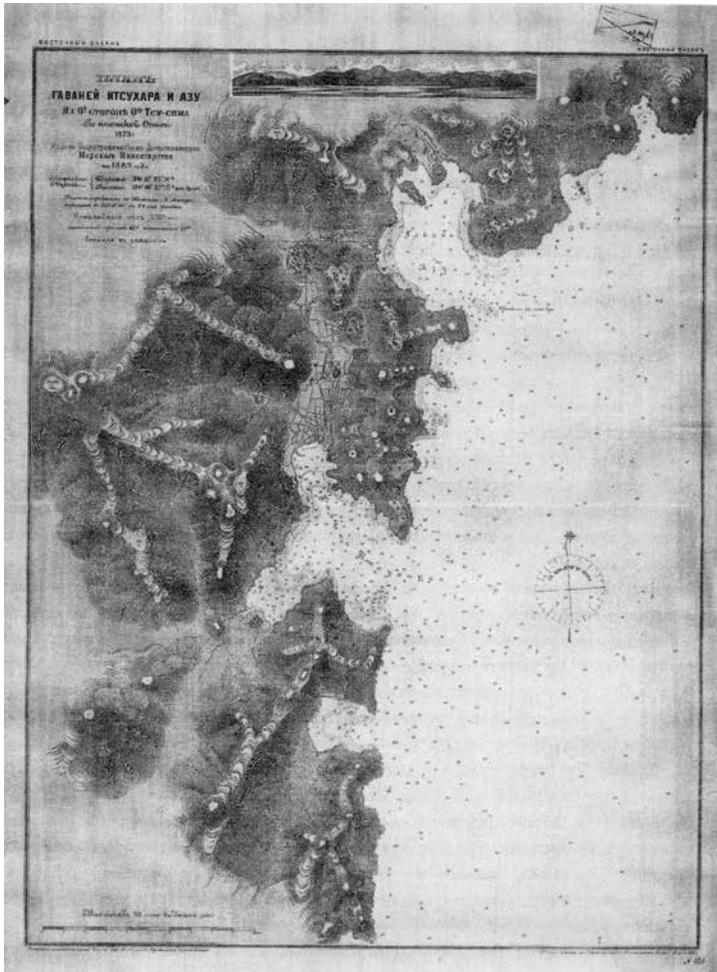
対馬島東岸の巖原湾図と阿須湾図（資料4）。

小樽湾図（縮尺：1インチ=346サーゼン）。

蝦夷島西岸の壽都港図（縮尺：1インチ=442サーゼン）⁽²³⁾。

我がロシア国立海軍文書館に保存されているファイル資料（РГАВМФ. Ф. 402. Оп. 2. Д. 3694）によれば、全部で日本製海図と図、計35点が化学墨を用いて複写された（付表1参照）。【表によると35点ではなく36点】

指摘しておかなければならないのは、ロシア語による海図の原本の一部が、子牛皮紙による刊



資料4 対馬島巖原港図・阿須港図（1875年日本測量図による）
1885年海軍省水路局発行（РГАВМФ. Ф. 1331. Оп. 10. Д. 260.）

行部数決定のため、K. シトレメル&S. ラザレフ印刷所とリトグラフ印刷所に引き渡されたことである。例えば、ロシア語による日本沿岸図のうちの1つは「多色刷りで」487部、「黒単色で」24部印刷された。この作業に対してK. シトレメル&S. ラザレフ印刷所は50ルーブル85コペイカを受け取った⁽²⁴⁾。他の図は水路局でリトグラフに印刷された(例えば、対馬島厳原湾と阿須湾図)。

日本沿岸を対象としたロシア製の海図刊行が終了したのは、水路局が統合水路本部に改組された後のことであった。それを示していることとして例えば、統合水路本部長R.I. バジェノフ海軍中将与海図部長代行V.F. アンドレエフ陸軍中佐が、日本沿岸を対象としたものを含め、新たに刊行された海図の原本と共に署名入りの初刷りを文書館の目録に登録することを統合水路本部の文書館主任に提案した(資料2参照)。この提案は実行された⁽²⁵⁾。

最後に次のことを指摘しておきたい。すなわち1880年代にロシア海軍省の水路局そして統合水路本部の士官および勤務者により、日本の海軍軍人の測量に基づいた日本沿岸のロシア語による海図が30点以上の刊行が準備され、印刷されたのである。(翻訳：有泉和子)

付表1 1880年代ロシアの日本沿岸海図・図 化学墨を用いた製図【Вычерчивание химической тушью】

ロシア国立海軍文書館所蔵資料より作成 (РГАВМФ. Ф. 402. Оп. 2. Д. 3694)

№	海図(図)	作製者	労働対価
1. 2. 3. 4. 5.	宮津港(若狭湾)海図 隠岐島海図、西郷湾図附 駿河湾・相模湾海図 東京湾海図2枚 東京湾海図	製図生P. アニシモフ 【П.Анисимов】	5ルーブル14コペイカ 23ルーブル95コペイカ 59ルーブル67½コペイカ 112ルーブル65½コペイカ 95ルーブル20コペイカ
6. 7. 8. 9. 10. 11. 12.	隠岐島海図、西郷湾図 朝鮮半島海図、対馬・壹岐島附 シヨアリ湾図キオト碇地チェボ コウ碇地図(複数点)【П л а н ы залива Шоаль, якорного места Киото и Чепокоу】 早崎海峡【早崎水道】・八代湾 (九州西部地方)海図 宇和島湾図 小樽湾図・スツ港図【壽都港 (すつつこう)図か】(北海道 西岸) 釜石港・オズチ湾【大槌湾か】 図	製図士M. F. ヴィノグラード フ【М.Ф.Виноградов】	35ルーブル88コペイカ 23ルーブル56コペイカ 50ルーブル60コペイカ 20ルーブル00コペイカ 45ルーブル61コペイカ 27ルーブル18コペイカ 64ルーブル30½コペイカ 35ルーブル88コペイカ
13. 14.	佐渡島小木湾図、伏木碇地図(本 州北西部) 七尾湾海図、スツ図【壽都港 (すつつこう)図か】	製図生K. N. プレイトシプレ ヘル【К.Н. Брейтшпрехер】	30ルーブル28コペイカ 24ルーブル44コペイカ
15. 16.	油谷湾および日本南西部図 厳原港図・アザ港【阿須港(あず こう)か】図	十等官アブラモフ 【Абрамов】	49ルーブル23½コペイカ 111ルーブル81½コペイカ

No	海図(図)	作製者	労働対価
17. 18.	小蒲湾図 若狭湾海図境港附、敦賀湾海図 網代湾図	製図生V.Z. アコヴェンコフ 【B.З.Аковенков】	39ルーブル93コペイカ 19ルーブル50コペイカ
19.	青森碓地・ホヘツア碓地図		28ルーブル79½コペイカ
20.	佐渡海図、新潟港への航路、酒田		40ルーブル64コペイカ
21.	港、加茂港、新潟港図附		28ルーブル28コペイカ
22.	日本東岸海図 イワン・サキ岬 からオハン・サキ岬まで【「陸 前陸中海岸自岩井埼至御箱埼 (赤門地図15-62)」か】		70ルーブル64コペイカ
23.	諸湾図、島原島口之津、タミオカ 【富岡湾か】(九州西部)(複数点)		製図士P. アニシモフ、 K.N. プレイトシブレヘル
24.	八代湾図、天草諸島図(複数点)	92ルーブル93½コペイカ	
25.	オミナト(アンド)【大湊港(安 渡)か】図、オハタ河口(日本北 端)(複数点)	48ルーブル55½コペイカ	
26.	新室蘭錨地図、モリ【森か】投錨 地図、浦河湾図	79ルーブル69½コペイカ	
27.	ウヤタガマ港図	80ルーブル68½コペイカ	
28.	能登半島七尾湾北部図(含仲井・ 穴水錨地)	製図生S. ニコラエフ 【С.Николаев】	29ルーブル65コペイカ
29.	四国ミツクイエ港図【三机畷か。 「伊予国三机畷(赤門地図8-112) か】		20ルーブル32½コペイカ
30.	福島湾、三厩湾図		21ルーブル77コペイカ
31.	厚岸湾、浜中湾図 (北海道・蝦 夷島東部)		21ルーブル24½コペイカ
32.	大船渡港図		74ルーブル05コペイカ
33.	対馬半島東岸・キンクワサン図 【金華山か】【「日本中土東岸遠 島半島金華山(赤門地図12- 10)か】		79ルーブル66½コペイカ
34.	シェイムルボ錨地図【П л а н якорного места Шеймуру-по朝 鮮の済物浦(現在の仁川)泊地 図か「朝鮮東岸済物浦泊地略測 図」(赤門地図12-75)か】		製図生P. トウルスタレフス キー【П.Трусталеvский】
35.	佐伯湾図(九州東岸)	42ルーブル18コペイカ	
36.	サメ錨地図【鮫浦(現在の八戸 港)か】、久慈湾図	製図生G. ザハロフ 【Г.Захаров】	21ルーブル16コペイカ

【地名の同定は、海上保安庁海洋情報部海洋資料館「海図アーカイブ」「所蔵目録」「明治初期の海図」「旧版海図」、『東京大学史料編纂所研究成果報告 2014-3 近代移行期歴史地図把握のタイムカプセル』(2015)等を参照。「錨地」、「泊地」、「水道」等の用語はそのまま使った】

付表2 12月2日水路総庁文書館に移管されたロシアの日本沿岸海図日本沿岸図原図
 (ロシア国立海軍文書館所蔵資料より作成)
 (РГАВМФ. Ф. 402. Оп. 2. Д. 3694. Л. 53-54)

No	地域	名称	縮尺、サージェン ／インチ	海図(図)番号
8	対馬	網代湾図	90,5	—
9		厳原港図・阿須港(あずこう)図	110	63
10	島原・天草諸島、九州(日本西南端)	諸湾図:島原諸島口之津、タミオカ【富岡湾か】、天草諸島	109	103
11		早崎水道図	435	104
12		八代湾(九州西岸)図	400	112
13		早崎水道・八代湾(九州)海図	916	113
14	四国	宇和島湾図	275	—
15		ミツクイエ【三机畷か】港図	153	150
16	本州西岸	若狭湾海図 坂井港図附 敦賀湾図	2870 534 770	139
17		能登半島七尾北湾図	285	116
18		新潟港への航路海図、佐渡島海図、酒田港図、加茂港図、新潟港図	5マイル/インチ 295 295 512	144
19	日本北端、蝦夷島	本州三厩湾図 蝦夷島福島湾図	448 444	7027
20		アヴォマリ湾図【青森湾図か】 ノフィットウシ【野辺地か】錨地	190 276	37
21		本州大湊港(安渡)図 オエガタ河口図	217 290	36
22	蝦夷島(北海道)	ヴォルカノ湾【залив Волкано→Volcano Bay→噴火湾→内浦湾か】モリ【森か】 投錨地図	100	137
		新室蘭港図 浦河湾図	362,5 75	138
23		小樽湾図壽都港図	438 444	4 5
24		アキシ湾図【厚岸湾図か】 浜中湾図	500 790	27 138
25		野付錨地図 根室錨地図	158 130	2 80
26		ゴイオマン海峡図【Пролив Гойоман、瑤瑤瑠(ごようまい)海峡か】	445	8

[注]

- (1) История морского картографического производства в России (конец XIX—начало XX в.) / А.В. Антошкевич, А.А. Комарицын, В.Г. Смирнов, Б.С. Фридман. СПб.: ЦКП ВМФ, 2003. С. 23, 26-27, 47, 51.
- (2) *Богданов К.А.* Картографическое производство Военно-Морского Флота. Исторический очерк. Л.: Главное управление навигации и океанографии Министерства обороны СССР, 1977. С. 70.
- (3) История морского картографического производства в России. . . С. 56.
- (4) 第五葉【**Лист V**】は、海図№861（朝鮮西海岸にある日本の投錨地ア・サン【A-san anchorage 牙山か】）の複製に当てられた（縮尺：1/26,880＝1インチが320サージャン）
- (5) Российский государственный архив Военно-Морского Флота – РГАВМФ. Ф. 402. Оп. 2. Д. 3694. Л. 1-2.
- (6) Там же. Л. 2.
- (7) Там же. Л. 4, 13, 21, 23.
- (8) Там же. Л. 13-14.
- (9) Там же. Л. 3, 5, 9.
- (10) Там же. Л. 6-8.
- (11) Отчет директора Гидрографического департамента за 1883 год. СПб., 1885. С. 203.
- (12) РГАВМФ. Ф. 402. Оп. 2. Д. 3694. Л. 57.
- (13) Там же. Л. 113-113 об.
- (14) Отчет директора Гидрографического департамента за 1884 год. СПб., 1886. С. 246.
- (15) 1885年1月1日、F.F. ヴェセラゴは海軍工廠理事官の一員【**член Адмиралтейств-Совета**】に任命された(РГАВМФ. Ф. 402. Оп. 2. Д. 1041. Л. 11, 12)。
- (16) РГАВМФ. Ф. 402. Оп. 2. Д. 3694. Л. 153, 157.
- (17) Там же. Л. 182-183.
- (18) Там же. Л. 53-55.
- (19) Там же. Л. 67, 69-70.
- (20) Там же. Л. 73.
- (21) Там же. Л. 97.
- (22) Там же. Л. 79.
- (23) Отчет директора Гидрографического департамента за 1885 год. СПб., 1887. С. 186.
- (24) РГАВМФ. Ф. 402. Оп. 2. Д. 3694. Л. 32, 33.
- (25) Там же. Л. 213-214.

(訳者注)

- i 本稿を翻訳するに当たり、科学研究費補助金基礎研究 (C)「近代化模索期の『国史』編纂と地図作成 赤門書庫旧蔵地図研究 (課題番号24520737 研究代表・杉本史子)」、および、東京大学史料編纂所画像資料解析センター「赤門書庫旧蔵地図」プロジェクト (研究代表・杉本史子) の研究成果報告書、『近代以降期歴史地図把握のタイムカプセル「赤門書庫旧蔵地図」の研究』(東京大学史料編纂所研究成果報告2014. 3) を参照させていただきました。記して感謝致します。
- ii 安藤謙介 (1854-1924) は、土佐出身の明治から大正に活躍した検察官、官僚、政治家、実業家。1878年2月在サント・ペテルブルグ日本公使館勤務、同12月三等書記生、1881年同職辞職、1883年8月再び外務省書記生。この間、ペテルブルグ大学で法学、行政学を学ぶとともに、日本語と書道の教師を務めていたことがあり (1882-)、この地図翻訳に従事した1882-1883年とは、その当時のことと思われる。初めニコライ塾、後に東京外国語学校 (現在の東京外国語大学) 魯語科に学ぶ。

当時の校長は中江兆民。後に放校になるも、やはり、辞職した兆民にフランス語を学ぶ。外務省へは勝海舟を介した外務少輔・森有禮の斡旋で出仕、サハリンのコルサコフ領事館書記一等見習（1876年4月）を皮切りに公館勤務をする。帰国は「7年間の在露を経た1885年2月」。1886年三たび外務省出仕。1902年日露協会を創立、創立委員の一人となる。会頭は榎本武揚。1903-04年日露戦争時、日本は陸戦の法規慣例に関する条約（通称ハーグ陸戦条約、1899年）を忠実に履行したため、捕虜は人道的に扱われたが、ロシア軍捕虜延べ6千人以上は愛媛県松山の捕虜収容所に収容され、当時県知事であった安藤の指示により、大切にされた。外国語学校の御雇魯語教師メチニコフについて記しているのも安藤である。帰国、および、検事任官後の安藤の詳細な履歴は省略する。八面六臂の活動ぶりを各自確かめられたい。